

2021年「志成会たより」新春号によせて

昨年2020年は、Covid-19(コロナウイルス感染症)が百年前のインフルエンザのパンデミック(スペイン風邪)を上回る規模での世界的流行となり、流行開始後約1年を経た現在でも人々の社会、日常生活に多大な影響が出ています。国内でも、経済と医療を両立させる「go to eat & travel」等の施策により増加した患者(第3波)をどう抑制するかが喫緊の課題となっています。

古くは旧約聖書の「サムエル記」の5/6章にペストと思しき言葉があり、6~7世紀のビザンティン帝国内での度重なるペストで地中海世界では人口が1/4まで減少した結果、帝国の衰退とイスラム勢力に塗りつぶされました。中世ヨーロッパでもペスト(黒死病)の流行で人口が半減し、その後の封建体制・農奴制の崩壊/中央集権化と、ローマカトリックの権威が失墜しルネッサンスと宗教改革につながるなど、人類が社会生活を営む上での影響は計り知れないものがあり、有史以来感染症との闘いの歴史でもあったともいえます。

近年、特徴的なのは21世紀に入ってほぼ10年ごとにSARS/MARSなど新興ウイルス感染症が発生していることです。森林伐採、焼き畑農業等により野生動物と人間の関係性が変化し、新たな感染症が交通機関の発達と交流の普遍化により世界的規模で広がり易くなっていると思われます。

コロナウイルス世界的パンデミックのために1年延期された東京オリンピック/パラリンピック7月開催前までにはワクチン接種が国内一部でも可能になりそうなニュースが11月末に入っています。また、国内研究としてコロナ罹患後の中和抗体価上昇が半年間は持続していることが確認され再感染の心配が減る良いニュースが入ってきています。オリンピックをきっかけとして日常生活を新たな形(new normal)でもよいので取り戻したいものであります。

12月6日早朝、小惑星「ハヤブサ2号」から放たれた岩石片採取カプセルが6年の歳月をかけ無事地球帰還。52億km先の直径900mの小惑星「リュウグウ」の着陸地点を見出すことさえ困難なゴツゴツした地表面から2回にわたる地表/内部の試料採取に成功し戻ってきた明るいニュースが最終稿提出直前に入ってきました。探査機本体は次の目標に向かってチャレンジするとのことで、暗い話題の多い中、我々に希望を与えるものとなっています。

恒例行事となっている年末の今年を代表する漢字に「密」が選ばれました。ここ当分は皆様とご一緒に、マスク着用、3密を避け、手洗い、うがい、換気、体調管理に気を付け、体力・免疫力を保持しつつ生活したいと思います。

コロナに罹患した場合でも、高齢者、持病を有する人全てが重症化し致命的になるわけではなく(厚労省の第二波6~8月患者調査によると、重症化率:全年齢平均:1.6%、70歳代:9%、80歳代↑:14.5%弱、致死率:全年齢平均:1.4%、70歳代:5.7%、80歳↑:14.0%)となっています。

栄養状態・持病のコントロールを良好なものとし自然免疫力保持しておけば大半の高齢者も健常成人同様に無症状或いは軽症で済むのではないかと考えています。その目的で、敵であるコロナウイルスの侵入経路の粘膜付着量と接触/定着時間を減らすことで感染/重症化抑制する工夫(マスク、手洗い、うがい、3密を避け、室内の加湿/換気)は非常に有効と考えられます。

飛沫感染対策のみならず、コロナウイルスACE2受容体が下部消化管にも存在し、便中に排泄されることが豪華客船ダイヤモンドプリンセス号の実態調査で分かっているので、便器、トイレの床、ドアノブの消毒剤での拭取りも併せて実施し、手指を介した粘膜(口/鼻/目)接触感染を防止する必要があります。

年を重ねて来ると、その時々、常識(真実)とされていたものが、いつの間にか間違っていたり、古いと打ち捨てられたり、当時の確証とされていたものさえ真逆或は修正され新事実となることを多く経験します。となると、世の中の新情報、物事にとらわれ過ぎず、といっても孤立することなく自分の感

覚(五感・メタ認知)を鍛えてそれに基づき大切な判断をしていくしかないように思われます。

ともかく今年も天からの頂き物である唯一無比なるこの身体の自立(自律)度を保った状態で維持して参りたいものであります。本年も皆様の心身ともなご健康を年初にあたり改めて祈念いたします。

令和三年 元旦

医療法人志成会 若宮医院

理事長 袴 光太郎